

# 我々はまだ市場を飼い馴らせていない

## 東京大学大学院・小野塚教授に聞く

世界最初のバブルは1637年にオランダで起こった「チューリップ恐慌」。  
そして2008年秋のリーマンショックで、我々はいまだに市場を飼い馴らせていないことに気づかされました。  
なぜ人類は失敗を繰り返すのか——。  
歴史をひもとくと、人類の大失敗の背後には合理性があったと言います。  
小野塚知二教授に、歴史から何を学べるのか、何を学ぶべきなのかを聞きました。

——小野塚さんは、「東京大学エグゼクティブ・マネジメント・プログラム（東大EMMP）」で経済史を講義していらつしやいます。この東大EMMPとは、世界に通用するビジネスリーダーを育成するプログラムとして始まったものだそうです。こういったビジネススクールに経済史の授業がある理由は何ですか。

小野塚 経済史を学ぶ目的のひとつは、今だけ見ても分からないことを過去の事例からくみ取ることにあると思います。

いわゆるビジネススクールでは、基本的には既知の事例を設定して、そこでなされる様々な判断・選択・行為の適切性を調べるという手法がありますが、本当のトップの間は、どうやったら解決できるのか分からない状況で決断を迫られるという場面に遭遇することがあるのではないのでしょうか。

けれど、「こんなことは経験したことがない」「分からない」では立ち行かなくなります。どんな場面でも決断して前に進む力をつけることがトップには必要です。

——受講生から要望や質問はありましたか？

小野塚 経済史を学んだことがない人がほとんどなので、こちらが考えつかない角度から質問をされること



世界初のバブル「チューリップ恐慌」時のパンフレット

はあります。例えば、1637年にオランダで起こった世界最初のバブル「チューリップ恐慌」の話をした時に、「市場は時々暴走して失敗するけれど、また元に戻っていく。市場にはそういう力があるからそれに任せておけばいいのでは？」という質問が出たんです。

**市場が暴走したのは自然現象ではない**

——元に戻るなら、流れに任せて放っておけばいいのでは？ ということですね。

小野塚 そうです。確かに暴走した市場は元に戻って健全に動くようになりますが、それには相当時間がかかります。しかも、ひとたび市場が暴走した時の被害や災厄の大きさは計り知れません。これをあたかも自然現象のように「今は嵐だけといずれは晴れになる」と言うだけでは済みませんよ。

経済現象をあたかも自然現象であるかのように捉える発想法が経済学

では強いのですが、経済はやはり人が作った現象であり、人が介入できる事柄です。

元に戻るのとはとても長いスパンの話ですし、その過程で企業が倒産したり、人生を狂わされている人々がいることを考えると、ただ流れに任せるわけにはいきません。

経済学はそういうところにきちんと入っていくべきだと思うんです。市場という神に任せておけばいいというのでは、何もやる事がなくなってしまう。

市場の合理性や効率性を説明することは経済学の大切な役割ですが、根底にあるのは人々が幸せに生きられる条件は何かを解明することにあるはずなんです。ですから「市場は合理的で効率的だから放っておけばいい」という話にはならない部分があると思います。

### 合理的な選択であっても失敗した例はある

——市場に精通している人が合理的な判断の下に商品を作り、実際に使われている経済モデルは山ほどありますが、その商品が非合理的な人間が動かしている。もっと言うと、どんなに合理的であっても失敗することってしょっちゅうか。

小野塚 そういうことですよ。

過去を見ていて恐ろしいのは、非合理的な選択だけが失敗の原因とは限らないことです。

その時点で共有された目的に対してきわめて合理的な選択を積み重ねながら、壮大な失敗へ突き進んでしまった事例が過去にはたくさんあるのです。

歴史は成功物語で綴られている部分が多く、負けた者の記録はほとんど残らないけれど、どんなに合理的でも失敗はあるんです。

——失敗の研究をやる動機づけは意外にないのかもしれない。

小野塚 成功は真似したいと思うけれど、失敗を真似したいと思う人はいませんから。

でもなぜ失敗したのか、という原因究明は絶対にやらなければいけないんです。飛行機事故でも原因究明は徹底的に行いますよね。東大EMMPの経済史シリーズは歴史の事故調査報告書だと考えています。

例えば、19世紀半ば以降に形成された世界経済の順調な発展パターンは、第一次世界大戦が勃発してガタガタになってしまった。第一次大戦とは経済や社会にとつては不測の大事件です。その責任をいままら追及してもしかたがたないですが、「なぜ戦争が起こったのか」という原因究明は今でも十分に意味があると思



### 小野塚 知二 おのづか ともじ

東京大学大学院経済学研究科 教授。東京大学社会科学研究所助手、横浜国立大学商学部専任講師、同大学商学部助教授、東京大学大学院経済学研究科助教授を経て2001年から現職。主な研究テーマは、近現代イギリス社会経済史とイギリス労使関係・労務管理史で、機械産業史、ヨーロッパ統合史、音楽社会史、食文化史、兵器産業・武器移転史などの諸分野でも活躍。

「小野塚さんはE.M.P.の授業で「人類が際限のない欲望を解放し始めてから500年、それに適合的な社会システム(市場経済・資本主義)が完成して来たかだが2000年」とおっしゃっていましたが、そのような観点から考えたら今はどんな時代だと思われていますか？」

### 人類はいまだに市場を 飼い馴らせていない

小野塚 どんな時代かは、今をどういうタイムスパンの中に置くかによって違ってきます。5000年は一番長く捉えたスパンで、人間の際限ない欲望が解放され始めてからの時代です。解放された欲望を満たすのに一番都合なシステムとして、市場経済や資本主義が確立して2000年と言っているわけです。

ただ、非常に長い目で見ると市場経済や資本主義はまだ完成していません。人間の欲望は際限がないという点で、思い通りにならない野獣のような性格を帯びています。だから、際限のない欲望に適合したシステムとしての市場経済も同様に凶暴な面を持っていきます。

500年のスパンで見ると、人類はまだそれを飼い馴らせていなくて、油断しているとガブツと噛まれる危険性が潜んでいます。それが、バブ

ル崩壊であったり、今回のリーマンショックだったりのことです。

でも、私たちには幸せになりたいとかお金をもっと増やしたいとか欲望があるので、儲けのチャンスがあると思うと気を許してそっちに流れてしまいます。

近現代はただか2000年ぐらいですが、その間だけでも何度も経済が破綻して悲惨な経験をしてきました。市場経済や資本主義は巧妙な仕組みですが、絶対的な神ではありません。そこに野蠻で危険な部分が見られていることは認識していないといけません。

私たちは欲望を一旦解放してしまいますから、これを元通りの箱に収めることはできません。解き放つたものをどうやって飼い馴らしていくかを考えることが、これからは今以上に重要なことになってくると思います。

### 健全な投資先があつてこそ 経済の発展は成り立つ

近現代の中で参照できるのは、具体的にはどのような部分になりますか？

小野塚 一概には言えませんが、私は20世紀の経済の仕組みはうまく動いていないと考えているんです。19世紀の世界経済が比較的スムーズ

だったのは、健全な投資先が常にあったからなんです。

レバレッジを利かせた商品や先物とかでなく、鉄道を建設するため証券が出てきて、投資家が投資をする。結果、その地域は経済が発展して利益が生まれてくるという良い循環が生まれていました。

「経済と実体がきちんと繋がっていったんですね。」

小野塚 そうです。世界経済が順調に発展している時は、健全な投資先が必ずありました。イギリスやフランスのような資本輸出国は、世界中の経済が発展しつつある地域に資本を輸出してきましたが、それにより、インフラが整備され世界各国の経済発展の基礎条件が作られてきたと言えます。

ところが、第一次世界大戦後に健全な投資先が安定的に探しくなくなってきました。第二次世界大戦後は先進国だと国民一人ひとりが豊かになり、自動車を持つたり洗濯機を買ったりするようになり、国内産業に投資することでどんどん成長していきました。

でも、一通り行き渡ると健全な投資先が見つけられなくなりますが、投資先がなければ金融はおかしなことになるんです。

「健全な投資先というか、実需を

競争の目的合理性は証明されないままに、「競争」という価値や信仰に殉じているのは美学ではあつても、目的合理的な手段や政策の選択とはいえない。それなのに、競争は正しいのだからと何でもかんでも競争だ、敗者が出るのは仕方ないという世の中はどうかと思うんです。

「ここ10年、20年で考えると日本はまさに競争の社会と言えますね。小野塚 大方が納得できる目的を達成するための合理的な手段として、競争が冷静に採用されているとは思えないと思います。この10年、15年ほどの日本では、もっと競争的でないといけないんだとみんなが納得できるような説明責任が果たされてきませんでした。」

その場の雰囲気や言葉に競争だけを尊重し、そのことの目的合理性について冷静な説明ができません。経済が危なくなつた途端に「何がなぜ、失敗したのか」を確かめせず、別の方向へ向かうのはよくないんです。今の日本は事前も事後も説明責任がないまま、政策と論調だけがあつちに行つたりこつちに來たりしています。

経済史はすぐには役に立たない学問ですが、過去を振り返り今に生かして人々の役に立つてもらふことは

伴っている投資先がなくて、儲けるという目的のためにのみ合理的で効率的な金融商品に流れると、市場に噛みつかれることはこれからも起こると。

小野塚 そうです。ものすごく大きな波が市場を襲って、何億人もの人々が被害に遭う可能性があります。それをどうしていくのかという話になると思います。

### 市場は人の手で作られた 合理的な失敗はなくならない

近現代はただか2000年というスパンで考えた場合は、当然このような状況は続くのでしょうか。

小野塚 私はそうだと思います。市場は簡単に飼い馴らせない。けれども欲望を抑制してみんなが江戸時代のようにならざるに社会に戻ることはできない。

私たちは噛みつかれる危険があつても、儲けるチャンスがあればそこに飛びつくと思うんです。ですから、同じことは繰り返されると思います。その中で必ずしも学習して次に生かせることは必ず見つけていかなければいけません。

合理的な失敗はなくならないでしょうね。理由はいろいろありますが、一番大きいのは、目的に対して合理的であることとすることによって認識

もっとやっつけていきたいですね。

### 人が幸せになるために 過去の失敗から学ぶ

「選択肢もほとんど少なくなつていく中で、合理的で人々が豊かになるための判断は過去の失敗から学べる部分も多いですよ。」

小野塚 現在と対照可能な事例はいくらでもありますし、これまでも経済史研究はそれを描いてきました。これからは、大失敗の背後に作用した合理性に注目することによって何を導き出せるか踏み込みたいと思っています。

「経済史を学ぼうと思つていても何かから手をつけていいのかわからないという人が多いと思うのですが、推薦していただける本はありますか。」

小野塚 そうですね。経済史の本って難しいものが多いんですよ。入門編として読むのであれば、わたくしどもの学会の研究活動の成果ですが、「自由と公共性」介入的自由主義とその思想的起点、「大塚久雄」共同体の基礎理論を読み直す」や、「秋元英一」世界大恐慌——1929年におこったか「はい」と思います。

世界的な不況の中で経済史から読み解けることはきつとあるはずですが、

(構成 秋元志穂ライター)



「世界大恐慌——1929年に何が起きたか」(秋元英一、講談社学術文庫)



「大塚久雄『共同体の基礎理論』を讀み直す」(小野塚知二、沼尻 晃伸、日本経済評論社)



「自由と公共性——介入的自由主義とその思想的起点」(小野塚知二、日本経済評論社)